

中国における『万葉集』の伝播と その翻訳状況について

鄒 双双*

(e-mail: shuanger348@hotmail.com)

目 次

1. はじめに
 2. 中国における万葉集の紹介——書誌学的な視点から
 3. 『万葉集』紹介の先駆者たち
 4. 中国における『万葉集』の訳本
 5. 各万葉訳本の「味付け」
 6. 結び
-

1. はじめに

佐佐木信綱は、歌人として活躍していた以外に、万葉研究者として万葉歌の考証、評釈などに多大な業績を残した。そのみならず、『万葉集』を外国語に翻訳し、外国に弘布するために、惜しまなく努力しつつ、外国における『万葉集』の紹介、翻訳状況にも常に関心を払い、しばしば『万葉集』の外国語訳を著作に取り入れていた。その熱心さは感心させられるものがある。例えば、著作『万葉漫筆』（改造社、1927年8月12日）に「万葉集の外国語訳本」、「海外にもたらした万葉集」、「羅馬字万葉集」、「万葉集の支那訳」など文章があり、新村出との共著『万葉図録：文献篇、地理篇』（靖文社、1940年11月18日）の「附載」に「海外に舶載されし万葉集」という項目を

* 関西大学 文学研究科 博士課程後期課程、東アジア文化交渉学

設け、自ら収集した各国の『万葉歌』訳本の写真を掲載している。また、自著『万葉清話』（靖文社、1942年5月10日）に「英訳万葉集に就いて」と「独訳万葉集に就いて」を収め、佐佐木信綱自身が関与した『万葉集』の英訳と独訳について詳しく述べている。

筆者は佐佐木信綱とその周辺を、文化交渉の視点から取り扱うものとして、佐佐木信綱が『万葉集』の外国語訳、および外国における伝播に対し関心を持つことに、興味を抱いた。調べたかぎりでは、中国における『万葉集』の紹介、並びに翻訳状況を取り扱った論文には、沈琳（2006）「中国における『万葉集』の翻訳」が挙げられる。これは、2002年までの『万葉集』漢訳本をテキストとして行った研究であるため、それ以降出現した新しい訳本を取り上げることができなかった。また、20世紀初頭における『万葉集』の雑誌での紹介と翻訳は、まったく言及されていない。本論は、書誌学の視点から系統的に『万葉集』の伝播状況を明らかにする上で、先学の諸研究を踏まえて『万葉集』の漢訳問題を検討する。

2. 中国における万葉集の紹介——書誌学的な視点から

『万葉集』の名称が最も早く中国に出現したのは、中国明時代（1368～1644年）の鄭舜功著『日本一鑑』（1565年）にさかのぼることができる。名称だけが触れられているが、歌は挙げられていない。ちなみに、明時代の候継高が撰した『全浙兵制』（1592年）の附録「日本風土」の中には、和歌三十九首が挙げられ、読法、釈音、切意も示してある。その中には、古今、拾遺、後拾遺、源氏物語、百人一首の歌が載っているが、万葉の歌は一首もない。その後、黄遵憲『日本国志』が世に現れる1890年までは、『万葉集』に関する叙述は見当たらない。『日本国志』の「卷之三十三 學術志二」に「日本古典文字史而有歌謡、上古以来口耳相伝。漢籍東来後乃借漢字之音而填以国語、如古万葉集所載和歌悉以漢字填之（略）」¹⁾と書かれ、「日本古代に文字がなく、歌謡があり、上古以来口承で伝えられている。漢籍が日本に将来された後、漢字の音を借用して国語に当てた。例えば、万葉集所載の和歌は悉く漢字に当てられている」という意味である。しかし、これは、『万葉集』を日本文字の説明の例として挙げただけで、詳しい紹介はない。上記の状況が前掲した佐佐木信綱の『万葉漫筆』の「万葉集の支那訳」にも言及されており、彼の考察に負うところが大きいことを断わっておく。つまり、近代までは、万葉集は中国人にほとんど注目されなかったのである。

¹⁾黄遵憲（2001）『日本国志』新華書店、P.345。なお、本文引用は2001年新華書店の復刻版により、『日本国志』は1890年広州で印刻され、1895年印刷出版された。

いうまでもなく、このような状況が生じたのは、近代までの文化交流における中国と日本が、「師匠」と「弟子」、「輸出」と「輸入」という関係だったからである。近代に入り、はじめて一辺倒的な日中関係が逆転して、中国が輸入国、日本が輸出国となったのである。

『万葉集』が本当に中国人の目にとまるようになったのは、近代以降である。特に日清戦争（1894～1895年）が重要な分かれ目となっている。第一次アヘン戦争（1839～1842年）、第二次アヘン戦争（1856～1860年）以来、中国で富国強兵を図って西方列強の圧迫に抵抗するためにさまざまな改革改良運動が展開されてきた。日清戦争以降、このような気運が更なる勢いで高まった。うち、日本を介し、西洋の政治、経済体制から学問までを導入することが一つの手として考えられた。その考えに基づき、日本への留学生が多く派遣され、西洋だけでなく、日本文学を含む日本関連の書物も数多く翻訳、紹介された。しかし、日本文学の中で、大概、当時日本に起こっている文学思潮や、流行作家の作品、つまり実際の情勢が窺われるようなものが紹介、翻訳の対象となっている。『万葉集』をはじめとする日本古代文学への関心は比較的希薄であった。管見におよぶかぎりでは20世紀20年代になってはじめて『万葉集』の紹介文と選訳が雑誌に掲載されるようになった。

日清戦争以降に中国雑誌に掲載された『万葉集』の紹介と翻訳について、筆者が上海図書館および他図書館で調査した資料を整理し、表1を作成した。

表1：中国雑誌に掲載された『万葉集』

タイトル	作者	掲載雑誌
万葉集	謝六逸	『文学週報』(176),1925
万葉集選訳	謝六逸	『文学週報』(182),1925
万葉集選訳	謝六逸	『文学週報』(190),1925
日本古典文学に就て	謝六逸	『改造』1926.7.6
貧窮問答歌：自万葉集	謝六逸	『小説月報』18(4),1927
万葉集	百葵	『日本』1(3),1930
万葉集抄訳	銭稻孫	『館棗』(5),1938.12
日本古代詮訳(四)	銭稻孫	『館棗』(6),1939.7
易馬問答	銭稻孫	『書滲』(10),1939.8.14

天皇遊獵内野之時中天皇使間人連老献歌	錢稻孫	『書滲』(16),1940.2.29
舒明天皇登香具山望国之時御製歌	錢稻孫	『書滲』(17),1940.3.25
乞食者詠二首	錢稻孫	『書滲』(18),1940.4.30
乞食者詠二首	錢稻孫	『書滲』(19),1940.5.30
万葉集の翻訳について	錢稻孫	『書滲』(20),1940.6.30
万葉訳零	錢稻孫	『書滲』(20),1940.6.30
賀陸奥国出金詔書哥一首並短歌	錢稻孫	『書滲』(21),1940.7.30
太宰帥大伴卿讚酒歌十三首 訳作十三韻	錢稻孫	『書滲』(22),1940.9.30
山上憶良貧窮問答歌一見万葉集卷五一	錢稻孫	『書滲』(24),1940.12.30
対訳万葉一詠水江浦島子(韻訳)	錢稻孫	『書滲』(25),1941.1.31
丹比真人笠麻呂下築紫時作歌一首並短歌一見万葉集卷四	錢稻孫	『書滲』(26),1941.2.28
追痛防人悲別之心作歌一見万葉集卷二十	錢稻孫	『書滲』(27),1941.3.31
万葉集選訳	錢稻孫	『中和月刊』2(2),1941
日本古典文学鑒賞(2):万葉集:古代詩歌的一大金字塔	許穎	『華文大阪毎日』6(2),1941
万葉集選訳(二):相聞	錢稻孫	『中和日刊』12(4),1941
「万葉集」在中国	希賢	『政治月刊』1(4),1941
万葉集選訳	錢稻孫	『中和月刊』3(7),1942
万葉集解説	王錫祿	『日本研究』1(1),1943
万葉集訳稿之一部	不明	『国民雑誌』3(9),1943
万葉集抄(卷三)	張文華	『華文大阪毎日』11(11),1943

万葉一葉	錢稻孫	『日本研究』2(2), 1944
奈良朝文化与万葉集(上)	王錫祿	『日本研究』3(4),1944
万葉一葉	錢稻孫	『日本研究』2(4),1944
万葉一葉	錢稻孫	『日本研究』2(5),1944
奈良朝文化与万葉集(下)	王錫祿	『日本研究』3(5),1944
万葉集抄	張文華	『華文大阪毎日』(131),1944
談談万葉集	錢稻孫	『中華週報』2(34),1945
万葉集(選訳)	錢稻孫	『訳文』(50),1957
万葉集選訳	沈策	『世界文学』1980(5)
万葉集選訳	楼適夷	『日本文学』1983(4)
日本的“万葉集”和中国古典文学	盧春生	『現代外語』1984.1
.....

表1に示しているように、『万葉集』の「輸入」は中国の「輸入政策」を打ち出すやいなやできたわけではない。日清戦争が終わって30年も経った20世紀20年代に入り、はじめて謝六逸の紹介を皮切りに、『万葉集』は中国で知られるようになった。特に、40年代に集中して紹介と漢訳が施されていた、という特徴が見受けられる。また、その時期の掲載雑誌は北京と上海発行の雑誌ばかりであることにも気づく。明、清時代の首都であった北京は政治、文化中心発信地であり、上海は当時の最も近代的な国際的な大都会であるため、雑誌のようなメディアも他の地域よりはるかに発達しているのは当然である。それをよそに、もうひとつ看過できない要因は、取り囲まれた北京の政治情勢である。1937年日中戦争が勃発してから2年後、中国華北地方が日本に占領され、北京も完全に汪精衛をはじめとする親日派によってできた偽政府の統治下となった。北京大学、清華大学、燕京大学は日本軍の閉鎖により教員、学生のほとんどが余儀なく南下させられ、最初は湖南長沙、後雲南昆明に臨時校舎を設置し、授業を継続した。他方、周作人、錢稻孫のような北京に残ることにした、いわゆる「落水」した親日派もいる。日本の統治下におかれた北京は、日本文学を宣揚させられたのは、想像に難くないであろう。王士花(2004)「華北淪陷区教育概述」によれば、日本統治下の北京には、国策に合わせた日本語教育や日本文化の普及が急務とされていたため、日本語が英語に取って代わり、各大学の必

修外国語となり、逆に英語が選択科目になった。大学のみならず、小、中学校にも学生が日本語学習を課せられた。このような雰囲気の後押しされ、『万葉集』がしばしば雑誌に登場するようになったのである。それは、雑誌の性格からも裏付けられる。上表に挙げられた『中和月刊』『日本』『書滲』といった雑誌は占領地発行の日本の国策を擁護する雑誌である。

ところが、40年代に中国に盛況を極めた『万葉集』は、その後の数十年間、ほぼ雑誌から姿が消えた。日中戦争終了直後の50、60年代に、日本文学の翻訳は小林多喜二、徳永直、そして宮本百合子が代表するプロレタリア文学作家の作品に中心を置くようになった。謝天振・查明建（1984）が指摘しているように、この時期の日本文学翻訳が思想性と政治性を重んじたため、日本古詩や、夏目漱石のような近代文学史上においての重要作家の作品翻訳が不十分であった。無論、『万葉集』も翻訳者の視野から外される不運から脱出することができなかった。とはいえ、『万葉集』が完全に無視されたわけではない。1984年に出版された『万葉集』（湖南人民出版社、1984年7月）の翻訳者楊烈が、公表していないが、実際60年代に『万葉集』を訳していたことが確認された。彼は「訳序」に次のように述べている。

六十年代对我来说是寂寞的年代，那时翻译此书只是为了消遣，为了安慰寂寞的灵魂，根本没有想到要出版。但在前些年，有人听说我翻译了《万叶集》，便说这是“封建余孽”²⁾

日本語に訳せば、「六十年代は私にとって寂しい時代である。あの時、『万葉集』を翻訳するのは、ただ気晴らしのため、孤独の魂を慰めるためだけであった。出版できるとは思ってもよらなかった。何年前、これを「封建残存勢力」と言う人もいた」となる。楊烈の言葉から、60、70年代は、『万葉集』が歓迎されないような環境であったことが推察される。

80年代以降に、日中外交が回復されたことに加え、「改革開放」政策が推進される中、日中間の文化交流が頻繁かつ緊密になり、一時日本留学がブームになっていた。それに伴い、『万葉集』についての研究や、翻訳も雨後の筍のように盛んになった。このような状況に齎された『万葉集』の翻訳はどうなったのかについては、第4節に譲る。

3. 『万葉集』紹介の先駆たち

戦前の中国における『万葉集』の伝播に寄与した人と言えば、表1に掲げた謝六逸と

²⁾ 楊烈(1984)「訳序」、同『万葉集』湖南人民出版社、P.4。

銭稻孫に真っ先に触れなければならない。二人は、大いに『万葉集』の紹介、翻訳に力を尽くしている。これから謝六逸と銭稻孫について紹介する。

謝六逸が大量に万葉歌を訳していないものの、近代以降の『万葉集』紹介の第一人者とは言える。1896年貴州に生まれ、1919年から1922年まで官費留学で早稲田大学政治経済科で勉強し、文学士を獲得したという。東京から上海に戻った後、最初は出版社の編集、校正に携わる。1926年夏旦大学に入り、自ら新聞学部を創立し、その主任を務める。1945年になくなる。謝六逸は生涯に亘って学校教師をする傍ら、児童文学研究、散文創作、日本文学研究にも意欲的に取り組む。早くも1927年『日本文学』（開明書店、1927年9月）を世に出した。この『日本文学』は中国初の系統的に日本文学史を紹介する書である³⁾。彼は、「序」に次のように日本文学を重要視すべきだと唱えている。

中国人在“同文同种”的错误观念之下，有多数人还在轻视日本的文学与语言。他们以日人的“汉诗汉文”代表日本自古迄今的文学；拿“三个月小成，六个月大成”的偷懒心理来蔑视日本的语言文字，否认日本固有的文学与他们历经变革的语言。这些错误，是有纠正的必要的。⁴⁾

日本語にすれば、「中国人は“同文同種”という誤った認識のもとに、多くがいまだに日本文学と日本語を軽視している。彼らは、日本人の“漢詩漢文”が日本文学のすべてと考え、“三カ月で小成、六カ月で大成”という怠ける心理で日本の言葉と文字を蔑視し、日本固有の文学と幾度の変革を経た日本語を否認する。これらの錯誤を正す必要がある」という意味である。

謝六逸は、多くの中国人が持っている日本語および日本文学に対する偏見を批判した。このような偏見を正す必要があると考え、日本文学史を研究し、紹介したのであろう。そこから、謝六逸が日本文学に明るいだけでなく、日本文学をふくめ、日本文化を尊重することも十分に窺われる。

3) 北京図書館編(1987年4月)『民国时期总书目 (1911~1949) : 外国文学』(書目文献出版社)によれば、『日本文学』は謝六逸が夏旦大学で講じた日本文学史の講義録を纏めたものである。上、下二巻がある。上巻は上古文学から、奈良文学、平安文学、鎌倉文学、室町文学までを網羅し、1927年9月に初版が発行された。下巻の初版は未見であるが、1929年8月に開明書店に出版された増訂版によれば、下巻は、江戸文学と明治文学に分かれ、付録「一九二九年的日本文学界」も付されている。また、1929年9月に『日本文学史 上下巻』が北新書局によって出された。該書は上古、中古、近古、近代及び現代という五つの時代に分けて日本文学の発展史を述べている。

4) 謝六逸(1995年1月)『日本文学史』序、陳江・陳庚初編『謝六逸文集』、商務印書館、P. 266-267。なお、これは、謝六逸(1929年)『日本文学史』(上下)(上海北新書局)の序文として書かれたもので、1929年9月30日に『語糸』第5巻第29号に発表されている。

また、『万葉集』について謝六逸は「東西洋の何人を問はず、若し日本の古典文学に就て尋ねる者があつたならば、余などは躊躇なく答へるであらう。「韻文には万葉あり、散文には源氏あり」⁵⁾と述べ、『万葉集』を古典文学における韻文の中の最高作品だと位置づけた。また、万葉歌について、こう記している。

「万葉集」中の歌句には、数多の頗る傑出せるものが存在する。東洋詩歌としては、自ら第一に指を支那に屈せねばならぬが、支那には嘗て三十一字形の短歌がない。これは日本特有の産出物と云はざるを得ない。短歌は一見簡陋にして深意無きに似たるも、然も能く一時の情感を捉へて、三十一字の形式を以て写し出したところ、実に一種単純なる情趣がある。⁶⁾

その三十一文字に内包した単純なる情趣に魅了されたようである。そのような短歌の独特な魅力に対する理解と愛着心が、錢稻孫を『万葉集』の紹介、翻訳の道に導いたのであらう。

謝六逸に次ぎ、『万葉集』の中国への伝播に寄与したのは錢稻孫である。錢稻孫は、1887年中国浙江に生まれ、1900年留日学生監督として東京に赴任する父錢恂と共に来日し、慶応義塾幼稚園（小学校）や東京高等師範学校で七年間教育を受ける。その後、イタリアに留学し、1910年帰国後、中華民国の教育部に勤務し、清華大学や北京大学で日本語を授する。20年代から、熟練した日本語を活用し、文学、文化、政治、医学など多岐に亘る日本語作品を数多く中国語に翻訳、紹介する。日本文学に対するまともな関心と尊敬という点では、周作人と比肩して先達とされている。⁷⁾1966年没する。彼の代表の翻訳作品は『漢訳万葉集選』（日本学術振興会、1959年3月）、『近松門左衛門・井原西鶴選集』（人民文学出版社、1987年）が挙げられる。

前述したように、錢稻孫は被占領地に居残り、日本に協力した「漢奸」と思われる部分がある。また、そのような中国民衆が憎らしく思う政治姿勢を取ったため、彼が日本研究者、翻訳家としての一面が長い間、中国人に軽視された。確かに錢稻孫が政治的立場において問われるところがあるが、日本文化、日本文学の伝播にある程度貢献した、ということも見逃すことができない。さらに、彼の『万葉集』翻訳活動もけって単純に「日本協力」と決め付けられない。前述した佐佐木信綱の記念館に、彼と錢稻孫との文通が所蔵されている。これらの文通によって、錢稻孫が翻訳に際しもろもろの困難に会いつつも耐え抜いて『万葉集』の翻訳を続けた姿が浮き彫りになった。そのうえ、新中国が成立した後も、錢稻孫は、『万葉集』を訳し続けた。これらのことは、錢稻孫がただ単に日本

5) 謝六逸(1926年7月)「日本古典文学に就て」、『改造』第8巻第7号、P.103。

6) 謝六逸(1926年7月)「日本古典文学に就て」、『改造』第8巻第7号、P.101。

7) 吉川幸次郎(1959)「跋」、錢稻孫訳『漢万葉集選』、日本学術振興会、P.195。

軍部と日本政府が企図した中国への文化侵略の手助けのために、いわゆる日本協力のために『万葉集』を翻訳し始めたのではない、ということ立証できる⁸⁾。

さらに、「万葉集解説」と「奈良朝文化与万葉集」(上下)を書いた王錫禄について、上掲表にある希賢の「『万葉集』在中國」に言及されている。

三月二十五日上海日文報大陸新報載：王錫禄，河北人，三十六歳，在日本東京帝大文學部大學院，在久松潜一教授指導之下，研究萬葉集。王君，於民國二十五年，畢業於北京大學，後在張家口的中學中任職。去年二月，至日本東京帝大研究，其研究報告爲關於萬葉集，爲用日語寫的原稿紙四十張的論文。⁹⁾

これによれば、王錫禄は北京大学を卒業し、ある中学校に勤めた後、1940年2月に東京大学で久松潜一の指導下で、『万葉集』を研究し始めたという。

4. 中国における『万葉集』の訳本

これまで主として戦前中国における『万葉集』の紹介と翻訳状況を、雑誌の掲載から書誌学的方法で考察してきた。戦前には、『万葉集』の翻訳は雑誌にしか散見されなかった。纏まった漢訳本が世に現れるようになったのは、銭稻孫訳の『漢訳万葉集選』をもって嚆矢とする。下記の表2が示すように、現在まで6種類もの訳本ができた。

表2：『万葉集』の漢訳本

作品	翻訳者	排列	収録	出版時間	出版社
①『漢訳万葉集選』	銭稻孫	巻別	311首	1959年3月	日本学術振興会
②『万葉集』	楊烈	巻別	全訳	1984年7月	湖南人民出版社
③『万葉集精選』	銭稻孫訳、 文潔若編	巻別	690首	1992年1月	中国友誼出版公司
④『万葉集選』	李芒	歌人別	734首	1998年10月	人民文学出版社
⑤『万葉集』	趙榮舛	巻別	全訳	2002年4月	訳林出版社
⑥『万葉集』上下	金偉、呉彦	巻別	全訳	2008年2月	人民文学出版社

①④は選訳であり、その他はすべて全訳である。

銭稻孫の『漢訳万葉集選』は、日本学術振興会によって出版されたものである。という

8) 銭稻孫と佐佐木信綱の文通に関しては、拙論(2011)「銭稻孫訳一九五九年版『漢訳万葉集選』の成立経緯—佐佐木信綱宛銭稻孫未発表書簡十二通、鈴木虎雄書簡一通—」 関西大学国文学会『国文学』第95号を参照されたい。

9) 希賢(1941)「『万葉集』在中國」、『政治月刊』第1巻第4期、P.88。

のは、翻訳者銭稻孫は万葉研究家の佐佐木信綱の依頼を受けて、日本側の協力を得て、以前から訳しだした万葉漢訳を継続し、出版にいたったのである。¹⁰⁾佐佐木信綱の協力なくしては、おそらく体裁の整った漢訳本の誕生はもう少し歳月が必要であろう。『漢訳万葉集選』に、佐佐木信綱の選り出した280余首に銭稻孫がさらに20余首を加え、あわせて311首が訳されている。原歌がなく、歌にある日本独特な風俗習慣や、地名などに関する注釈がある。

銭稻孫訳の『漢訳万葉集選』が出版して25年後の1984年に、ようやく中国で初めての漢訳本が出版された。これは、②の楊烈訳である。前述で触れたとおり、楊烈は60年代に『万葉集』を訳し始めたのである。簡潔な脚注が付いている。

③の『万葉集精選』の作者は『漢訳万葉集選』と同じく銭稻孫であるが、彼が亡くなった後、弟子文潔若によって整理されたのである。『万葉集精選』の収録歌数が『漢訳万葉集選』の311首から690首に倍増した。また、興味深いことに、『万葉集精選』は、通常の一首の歌に一種の訳、というような形式ではなく、歌によっては四種類の訳もある。このように編集した理由について、編集者の文潔若は「編後記」に次のように説明している。

进入新时期后，出版这部选集的事一直挂在我的心上。我把这部旧译稿从柜子里找了出來。然而有些和歌，竟有四中译文！我始终都想不出怎么可能把从离骚体到民歌体的风格迥乎不同的译诗编入一部选集。去年，承蒙天津刘柏丽同志寄赠她译的《怒湃译草》（波斯莪默·海涌原著）。拜读之后，我深受启发。她这部译作，每首诗都有“七绝”和“语体”两种译文。我就参照该译本的格式，把同一首和歌的几种译文一道编进去。¹¹⁾

「新時代に入り、私は常にこの選集の出版を気にかけている。これら古い訳稿をたんすの中から探し出した。しかし、歌によっては、なんと四種類もの訳文がある。私は、離騷体から民歌体まで風格が遙かに異なる訳詩を一冊の選集に編入できる手立てを、どうしても思いつかなかった。去年、天津の劉柏麗同志が訳著『怒湃訳草』をくれた。拝読後、大いに啓発された。この訳著には、一首の詩に“七言絶句体”と“口語体”の二種類の訳文がある。それで、私はその形式を参考に、同一和歌の何種類の訳文を全部選集に織り込んだのだ」ということである。つまり、銭稻孫が同一歌に対しても、さまざまな形で訳すのを試み、最適な翻訳を見出すのに工夫した。

¹⁰⁾ 『漢訳万葉集選』について、『東アジア文化交渉研究』第4号（関西大学文化交渉学教育研究拠点）に発表される小論（2011）「佐佐木信綱選、銭稻孫訳『漢訳万葉集選』研究—成立背景、出版事情、翻訳をめぐる一—」を参照されたい。

¹¹⁾ 文潔若（1992）「編後記」、銭稻孫訳、文潔若編『万葉集精選』中国友誼出版公司、P.279。

『万葉集選』の翻訳者李芒は、80、90年代日本文学翻訳の代表者である。1979年から中国日本文学研究会副会長、会長、中国和歌俳句研究会会長を歴任する。経験豊富な翻訳家として、「万葉集選」の他、徳永直の「太陽のない街」や三島由紀夫「春の雪」を筆頭とする小説、短歌、俳句を翻訳している。他の『万葉集』漢訳本が本来の巻順に歌を配列するのに対し、李芒は『万葉集選』に作者によって歌順番を再編し、巻末の「索引」だけに原本の歌番号に従うことにした。こうするのは、読者にとって歌人の作品の特色を掴みやすいという理由である、と李芒は説明している¹²⁾。

⑤⑥はここ最近十年間にできたものである。翻訳者のいずれも日本留学経験の持つ、日本語、日本文学の研究者である。日中国交の回復によって日本留学もさほど困難ではなくなるにつれ、『万葉集』、ひいては日本文学の研究者が良好な研究環境に恵まれてきた。そのため、『万葉集』の漢訳本も速すぎると思われるほど出版されるようになったのであろう。

5. 各万葉訳本の「味付け」

万葉翻訳者にとって『万葉集』は原材料であり、出来上がった万葉訳本はすなわち「一品」である。「一品」の持ち味がどうなるかは、調理師である翻訳者がどのような調理法で、どのように味付け、アレンジしていくかによって、ずいぶん違う。実は、翻訳者の間でも「調理法」、いわゆる翻訳手法をめぐる論争があった。

20世紀80年代に、『万葉集』と関連しているが、和歌の翻訳方法について熾烈な論争が展開され、多くの研究者たちがこの論争に注目していた。論争の発端は、李芒の「和歌漢訳問題小議」が『日語教学与研究』1979第1号においての発表であった。その後、和歌の漢訳をめぐる論文が、次々と発表されるようになった。論争の焦点は¹³⁾、「言葉遣いが古語に、それとも現代語にすべきか」と「元来の五七五七七の格調に従うべきか」というところに当たる。上掲した訳本のそれぞれの持ち味も異なる。

各訳本の翻訳手法を検討するに先立ち、まず近代に入り、誰より真っ先に万葉歌の漢訳を試みた謝六逸の翻訳を検討したい。

12) 李芒(1998)「訳本序」、同『万葉集選』人民文学出版社、P.9。

13) 主要論文は、『日語学習与研究』に掲載された李芒(1980年3月)「和歌漢訳問題再議」、沈策(1981年3月)「也談和歌漢訳問題」、李芒(1981年8月)「和歌漢訳問題三議」、李芒(主要論文は、『日語学習与研究』に掲載された李芒(1980年3月)「和歌漢訳問題再議」、沈策(1981年3月)「也談和歌漢訳問題」、李芒(1981年8月)「和歌漢訳問題三議」、李芒(1982年6月)「日本古典詩歌漢訳問題」、並びに『日本研究』に掲載された李芒(1986年10月)「和歌、俳句、漢詩、漢訳」などがある。

謝六逸はとりわけ柿本人麻呂の歌が気に入り、雑誌『文学週報』に掲載された謝六逸の万葉訳は悉く柿本人麻呂の歌である。「日本古典文学に就て」という文章にも、はっきりと「万葉詩人中で余の好む者は、矢張山部赤人と柿本人麿である」¹⁴⁾と述べている。彼は万葉歌を口語自由詩に訳している。やや長いが、『文学週報』第182号に掲載された謝六逸訳の「柿本朝臣人麻呂の、妻死して後に泣血哀慟して作りし歌」を記しておく。

輕（地名）是妻的鄉里，/到輕去的路途，時時可見。/若竟去了，要惹起人家的注意。/常常去呢，人家是会知道的。/我心這般思忖：/橫豎日後要相逢，/便坐在屋裡恋想著渡日，/不去又何妨呢！/水藻般附在我身旁的妻呀！/你如落山的夕陽，/你如浮雲蔽著的月兒/——逝了，逝了。/使者來告時，聽著他的聲音，/我無所錯，忐忑不寧。/我深深恋著的情，能有幾分得著安慰？/我妻平時眺望的輕市，/起哦在那兒靜立著聽——/畝火山的鳥聲猶昔，/ 何處能聽妻的聲音？/路上來往的行人，/更無一個似我妻，/吁嗟！万事皆休，/喚著妻的名兒，/抃袖而歸。¹⁵⁾

この訳詩が前掲謝六逸の「日本古典文学に就て」にも挙げられている。謝六逸自身が、この長歌の翻訳に対して、

詩歌は本より翻訳し難いもので、万葉の佳句に至つては殊に然りである。余が此の翻訳も努めて原詩の感情を表出しようとしたけれども、その結果は唯幾分を達して得たに過ぎない。¹⁶⁾

と、自身の訳詩に満足していないと述べている。同時に、万葉歌翻訳の困難さも語っている。なぜ口語自由詩に訳したのであろう。謝六逸は日本留学の時は、大正時代にあたり、ちょうど自由詩が風靡を呼んでいる頃であった故、謝六逸もその風潮に影響されたことが十分に考えられる。それで自由詩で翻訳試行したのであろう。事実、陳江・陳庚初(1995)「年譜」によれば、謝六逸は1921年に「自由詩の父」と呼ばれるアメリカ詩人ウォルター・ホイットマンの詩も訳し、雑誌に発表している。

謝六逸の自由詩風訳にひきかえ、錢稻孫は「以擬古之句調，庶見原文之時代与風格」¹⁷⁾と述べ、原文の時代と風格がみられるように擬古の句調をもって訳すことにした。錢稻孫の訳に対して、李芒は

14) 謝六逸(1926)「日本古典文学に就て」、『改造』第8巻第7号、P.103。

15) 謝六逸(1925)『文学週報』第182期、P.86。

16) 謝六逸(1925)『文学週報』第182期、P.86。

17) 錢稻孫(1959)「日本古典万葉集選訳序」、同『漢訳万葉集選』日本學術振興会、P.2。

据我看，他无论在正确理解和表達原歌的内容，还是在译歌的形式，如遣词造句等方面，都達到了相当高的水平，值得效法之处不少。18)

とあるように、正確に原歌の内容を理解、表現する面にしても、訳歌の形式、例えば言葉づかいなど面にしても、相当高いレベルに達しており、倣うに値するところが少なくないと高く評価した。その一方、下記のように錢稻孫の訳し方を首肯しがたい見方を示した。

他的大部分译歌，都用的是《诗经》笔法，文字过于古奥，一般读者很难读懂。它同《万叶集》原歌的古文相比，似乎有一定的距离，也就是说，原歌并不象译歌那么难懂。这种译法不利于让更多的中国读者了解《万叶集》，恐怕是不可取的。19)

日本語で言えば、「彼の大部分の訳歌は、『詩経』の筆法が駆使されている。言葉が古めかしく、普通の読者には難解である。『万葉集』の古文原歌から離れている。つまり、原歌は訳歌ほど難しくない。このような訳法は、より多くの中国読者に『万葉集』を知ってもらうのに不利であり、おそらく取るべきではないだろう」ということである。

要するに、李芒は、錢稻孫の駆使した古詩形式に賛同する一方、非常に洗練されているとはいえ、古めかしくて理解しがたい言葉づかいに眉を顰めるような見解を見せた。

李芒自身は、「古調今文」の翻訳手法を主張し、基本的に格調を古風にするが、なるべく平易な言葉を使用する。彼は、こうする理由を次のように述べている。

以便于大学文科毕业，喜爱诗歌又有些这方面常识的青年知识分子，个别词查查字典就能够读懂。20)

明らかに、李芒が想定した読者は、大学文科卒業の、詩歌を好む、ある程度その面の常識を持つ知識青年である。青年を主要な読者層として想定しているため、用語を若者に受け入れやすいように現代語で翻訳しているのであろう。

また、趙楽性は『万葉集』翻訳は、主に短歌翻訳に問題があると考えた。彼は、数十年の翻訳経験を通じて、既存の『万葉集』翻訳に次のような四つの問題があると指摘した。用語が古めかしく難解であること、本来ない意趣を添加すること、きれいな言葉で装飾すること、原歌の表現特色を問わず一律漢詩の形式に対応させること、といった四つの問題である。そこで彼は漢詩の五七言を使わず、短歌を三行詩、旋頭歌を四行に直訳する

18) 李芒(1979)「和歌漢訳問題小議」、『日語学習与研究』第1期、P.38。

19) 李芒(1979)「和歌漢訳問題小議」、『日語学習与研究』第1期、P.38。

20) 李芒(1998)「訳本序」、同『万叶集選』人民文学出版社、P.9。

ことにした²¹⁾。書き言葉も使うが、主として現代口語を用い、さらに原歌にない脚韻をつける。趙楽牲は既存翻訳方法に反対し、自分なりに選んだ方法に対して「我認為、這樣可能在接受上也許差一些，但比較容易如實地表現歌的內容和面貌」²²⁾と述べ、このような訳し方が受容上良くないという可能性を予測しつつも、如実に原歌の内容と面貌を表現するため、敢えてこのように訳したという。

具体的に『万葉集』巻8第1522首の山上憶良の七夕歌を例に、翻訳者がそれぞれどのように訳したのかを比較してみる。

原歌：多夫手二毛 投越都倍吉 天漢 徹太而礼婆可母 安麻多須弁奈吉

現代語訳：飛礮でも投げて越えさせることのできそうな天の川であるが、それが二人の間を隔てているからであろうか、こんなにも切ないのは。²³⁾

銭訳：天漢在望，可以拋石。維是相隔，百無其策。

楊译：投石犹能越，小河在望中。银河天上隔，无术渡天空。

李译：银河非广阔，投石似可抵。阻隔何其多，令人心焦急。

赵译：叹只一天河，分居两地，／飞石即可过；／无计奈何。

金・吳译：石头能投到对岸／可是有银河相隔／让人毫无办法

これらの翻訳は原文の意味を基本的に正確に読み取っており、意味では大差がない。ただ、訳文がだいたいぶちがうことが一目瞭然である。まず形式で言えば、銭訳と楊訳は整然たる四言、五言となっている。それに反し、趙訳と金訳は三行分けにし、各行の文字数に対する拘りがない。ただ、金・吳訳は他の訳と違い、句読符号が付けられていない。これは、おそらく原歌にもないと考えたのであろう。用語としては、銭訳と楊訳はやや古く、金・吳訳は現在に使用されている口語と変わらない。李訳と趙訳はその中間にある。

「安麻多須弁奈吉」の翻訳を例として更に深入りして比較してみよう。それに対する翻訳は上掲の順序でそれぞれ「百無其策」「无術」「令人心焦急」「无計奈何」「讓人毫无辦法」となっている。銭訳の四字熟語「百無其策」と楊訳の「无術」はあらたまった書き言葉である。趙訳も四字熟語の「无計奈何」を対応させるが、「百無其策」ほど堅くない。金・吳訳の「讓人毫无辦法」は、普段口癖になるほど使われている「どうしようもない」という感じで、完全に話し言葉である。その中で、「人にいらいらさせる」を意味する李訳の「令人心焦急」は、他の訳と明白に異なり、異色を帯びている。李芒は直接

21) 趙楽牲(2002)「訳序」、同『万葉集』訳林出版社、P.4。

22) 趙楽牲(2002)「訳序」、同『万葉集』訳林出版社、P.4。

23) 歌も現代語訳も佐竹昭広等校注(2000)の『新日本古典文学大系2 万葉集』岩波書店から取ったものである。

「すべなき」を訳さず、「すべなき」による心の苛立ちで訳しており、第三者としての作者の心情をより克明に表している。言い方を変えれば、ここで彼は直訳より「意識」を選んだ。

また、「天漢」^{あまのかわ}に対して、翻訳もおのおの異なる。銭訳はそのまま「天漢」を踏襲する。「天漢」は七夕詩に多く見られる詩語として、銭稻孫の必然の選択であろう。楊訳、李訳そして金・呉訳は「銀河」を用いるが、それは現在一般的に使用する表現である。趙訳の「天河」は通じないわけでもないが、現在にあまり使われていないが、

まとめて言えば、銭稻孫と楊烈は古調文語で、李芒は古調現代語で、趙楽姓と金訳は、三行詩を基本とした自由詩現代語で、おのおの違う手法を用いた。もとより翻訳者の能力にも関係しているが、現在に近いほど、古調文語が遠ざかり、より自由形式の現代語訳が多くなる、という傾向が見受けられる。

さらに、上例の七夕歌に限って言えば、中国古典を少し齧った中国人にとっては、銭訳と楊訳はさほど難解ではない。逆に言えば、古典教養を持たない人には理解しがたい部分があるといわざるを得ない。しかし、意味の読み取りはともかく、ただ中国語で朗読すると、明朗に聞こえ、リズム感がある。逆に、三行詩にした趙訳と金・呉訳は、現代の自由詩風に見えないこともないが、あまり言葉が平易で庶民的で、微妙に感じさせる。無論、そうであるからといって、優劣が判定できるというわけではない。

というのは、しばしば翻訳とは、原本の内容を、原語を解さないためにそれを知らない人びとに伝える営みとして、つまり記号転換の営為として理解されがちである。しかし、これは翻訳のうわへの責務に過ぎない。古荘真敬(2010)「翻訳——あるいは虚無を通じた「私たち」の変容」が論述したように、翻訳は「他者の思考」から「自分の思考」へと転換を経過し、原本の内容を内面化しなければならない。この転換の過程において、翻訳者の吸収度には、当然でありながら差異が出てくる。また、翻訳者が訳すに際し、「原本志向」か「読者志向」かの選択によって翻訳方法が異なってくる。さらに、翻訳者の狙い、すなわち原本内容を伝えようとする目標対象がおのおの違うため、使用する翻訳手法に相異があるのも、極めて理にかなっている。したがって訳詩の格付けが難しい。

しかしながら、『万葉集』のような独特な特徴と高度な芸術性を有する作品が翻訳対象になる時、どうして本来の「芸術性」を程よく維持しながら「文化内容」を伝達するかは、依然として翻訳者が直面する難問である。これをめぐる論争は今後も続くであろう。

6. 結び

本稿では、二つのことについて考察してきた。

一つは『万葉集』の中国への紹介、翻訳という伝播状況を書誌的方法で検討した。

『万葉集』は中国に知られるようになったのは、中国が日本をモデルとして改革を求めようとする日清戦争以降である。また、『万葉集』の広がりには、謝六逸の個人的な自主的な貢献もあれば、政治情勢の関係で日本側の協力あるいは強制要請という面もあると考えられる。50、60、70年代には、戦争で破綻した中日関係がまだ回復してない上に、中国がソ連志向であったため、『万葉集』についての紹介、研究がほとんど断絶された状況であった。最初の『万葉集』漢訳本が中国ではなく日本で出版されたことは、そのような政治状況と無関係とも言いかねる。80年代に入り、その状況が改善され、ようやく中国で訳本が出まわるようになった。つまり、中国における『万葉集』の伝播には時代背景が色濃く投影されている。

もう一つは、『万葉集』の翻訳問題である。翻訳者たちは、万葉歌の翻訳を実行する時、翻訳能力いかんだけではなく、「原本志向」か「読者志向」か、だれを読者と想定するかなど難問にも直面しなければならない。その答えによって翻訳手法も相違する。謝六逸は、日本留学の大正時代に自由詩の盛行に影響を受け、万葉歌を自由詩に翻訳した。それに反し、銭稻孫は良好な古典教養が備わることもあり、原文の風格が見られるように優雅な韻文に訳すことに挑んだ。さらに、李芒は現代の翻訳家として、知識青年読者層を主に考慮し、古調現代語に翻訳した。三者は、おのおの違う翻訳方法を見せたわけである。21世紀以来の趙訳と金・呉訳に示されているように、万葉歌が口語自由詩のように訳される傾向が見受けられる。

【参考文献】

- 伊井春樹編(2004)『日本文学翻訳の可能性—国際日本文学研究報告集2』、風間書房。
 王士花(2004)「華北淪陷区教育概述」、『抗日戦争研究』、P. 79-101。
 佐竹昭広等校注(2000)『新日本古典文学大系2 万葉集』、岩波書店。
 邱巍(2010)『呉興錢家：近代學術文化家族的断裂与伝承』、浙江大学出版社。
 謝天振・查明建(2007)『外国文学翻訳史』(上下)、湖北教育出版社。
 謝天振(2007)『訳介学導論』北京大学出版社。
 沈琳(2006)「中国における『万葉集』の翻訳」、『万葉古代学研究所年報』(4)、P. 65-79。
 陳江・陳庚初(1995)「謝六逸年譜(簡編)(1898-1945)」、同『謝六逸文集』商務印書館、P. 422-477。
 古荘真敬(2010)「翻訳—あるいは虚無を通じた「私たち」の変容」、山本真弓編著『文化と政治の翻訳学—異文化研究と翻訳の可能性』、明石書店、P.218-240。

要 旨

日本古典文学、ひいては日本文学の海外発信を研究するには、日本現存の最古の歌集としての『万葉集』の伝播と翻訳状況を検討しなければならない。しかし、これまで、それについて書誌学視点からの系統的な研究は見当たらない。本研究は、二十世紀初頭から雑誌に散在した『万葉集』の紹介や翻訳を整理し、日中関係の変化によって『万葉集』に対する関心の度合いが異なるという特徴を明瞭化した。特に、日本統治下に置かれた北京では、『万葉集』の翻訳は盛んであった。その状況に基づき、とりわけ『万葉集』の伝播に貢献した先駆謝六逸と銭稻孫の翻訳手法を検討した。謝六逸の自由詩風に反して、銭稻孫は古調文語で翻訳を試みたことがわかった。また、現在まで出版された『万葉集』漢訳本を分析し、その翻訳状況の傾向を見出した。

キーワード：『万葉集』、漢訳、書誌学、銭稻孫、謝六逸

투 고 : 2010. 11. 30

1차 심사 : 2010. 12. 11

2차 심사 : 2011. 1. 08